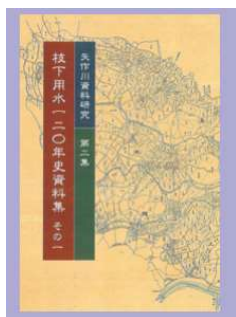


豊田市矢作川研究所の30年 特集



豊田市矢作川研究所HPより
写真等掲載しています

はじめに ～ 矢作川と豊田市矢作川研究所前史
 # 豊田市矢作川環境整備計画と欧州視察
 # 近自然河川工法
 # 古川水辺公園と愛護会誕生

P1

1 第1期 1994設立～2004年

P2～3

第3セクター／豊田市・枝下用水土地改良区・矢作川漁協
 # 研究所シンポジウム(1996～)、矢作川研究(1997～)、
 Rio(1998～)、ホームページ(1999～)
 # 矢作川天然アユ調査会(1996年～)
 # 矢作川水源林調査(1998年～)
 # 古川プロジェクト(1999～2001年)
 # 東海豪雨(2000年)
 # 矢作川「川会議」と矢作川宣言(2001年)
 # 矢作川学校の創設(2002年)
 # 矢作川100年誌資料研究第1集と「環境漁協宣言」(2002～2003年)
 # [愛知・川の会設立\(2003.3月\)](#)と矢作川関係者の参画
 # 市営体制への移行(2003年)



2 第Ⅱ期 2004～2014年

P4～6

東京大学愛知演習林との合同セミナー(2004年)
 # 豊田市平成の大合併(2005年)
 # 矢作川森の健康診断(2005～2014年)
 # 2005愛知万博と第8回「川の日」ワークショップ矢作川大会(2005年)
 # 枝下用水120年誌編集作業の開始(2008年)
 # [矢作川流域圏懇談会設立と研究所の参画\(2010年～\)](#)
 # 第10回生物多様性条約締約国会議 愛知・名古屋 開催(2010年)
 # 矢作川誌資料研究第2集「枝下用水120年誌資料集」その1(2011年)
 # 矢作川誌資料研究第3集「枝下用水120年誌資料集」その2(2013年)
 # 宮田昌和氏が研究所所長就任(2013年)
 # [愛知・川の会 記念講演「矢作川研究所のしなければならないこと」](#)
 # 豊田市 おいでん・山村センター設立(2013年)



3 第Ⅲ期 2014～現在(2024年)

P6～10

矢作川森の健康診断最終回(2014年)
 # 矢作川川会議終焉(2015年)と
 その後の古川水辺公園閉鎖の意味する事・継承とは何か
 # 小さな自然再生「ふるさとの川づくり事業」岩本川で開始(2015年)
 # (新計画)豊田市 矢作川河川環境活性化プラン」策定(2016年)
 # 豊田市矢作川研究所20年の成果を反映
 # 外来種対策の継承「アカミガメ対策推進プロジェクト」開始(2016年)
 # ニホンミツバチを活用した市民活動活性化の試みを開始(2016年)
 # 岩本川創友会設立(2017年)
 # 阿摺ダム下流(通称ソジバ)矢作川河床環境改善実験・調査開始(2017年)
 # 「矢作川かわまちづくり」(豊田市)が登録される(2018年)
 # [矢作川流域圏懇談会10年誌作成にかかる「流域圏研究」\(2019～2020年\)](#)
 # 「アカミガメ防除マニュアル」発行(2020年3月)
 # 豊田市アカミガメ防除プロジェクト実行委員会編
 # 次の「ふるさとの川づくり」として広沢川での事業展開が始まる(2020年)
 # 「川づくりガイドブック」【草地編】(2021.3月発行)【竹林編】(2022年3月発行)
 # 第2回 中部のいい川ワークショップ in 矢作川流域圏(2024年1月)
 # 第4回 矢作川流域圏懇談会 公開講座「川がつなぐ 私たちの未来」(2024年2月)
 # 第212回 河川文化を語る会
 「地域に根ざした川の研究所 30年のあゆみ」(2024年3月)



平成 28 年 6 月
 豊 田 市



愛知・川の会設立(2003年)の9年ほど前、1994年7月に「豊田市矢作川研究所」が誕生し今年でちょうど30年となります。ある意味当会の大先輩でもあり、矢作川関係及び研究所の方々には設立時から愛知・川の会活動に参加いただいております。今回は、「豊田市矢作川研究所30年のあゆみ」について特集します。実は私(近藤)は、研究所創設時に当時の豊田土木事務所に赴任しており、アドバイザー的な任も担っていました。以降ずっと研究所と関わりを持ち続けており、私にとっては様々なプロジェクトや川づくりを進める上での重要な指標だったのです。

そもそも矢作川の河川管理者でもない豊田市が、なぜこのような研究所を創設したのか。それは、豊田市を流れる矢作川とその流域を市固有の豊かな地域財産と捉えたからであり、これを未来へと継承していくことが重要だと考えたからでしょう。このことはとりわけ2005年に豊田市が東加茂郡、西加茂郡を含めた大合併をしたことにより、さらに大きな意味を持つことになるわけなのですが、このような行政組織内の研究所の場合、10年20年と歴史を重ねていくにつれ、その存在意義が役所内部で薄れていくという宿命も持っています。例え矢作川研究所のように外部からの評価が高いものだったとしても、です。そこで今回改めて、「研究所30年のあゆみ」を外部の私が長らく見続けてきた視点により、記録してみたいと思います。記述にあたりましては、豊田市矢作川研究所のホームページ <https://www.yahagigawa.jp> 季刊誌 Rio (1998年～現在) <https://www.yahagigawa.jp/rio/> 矢作川研究(1997～ No.28) <https://www.yahagigawa.jp/kenkyuu/> などを読み、活用させていただいております。なお今回改めて研究所の方々への取材は行っていないため、認識の違いなどもあるかもしれませんが、そのあたりは2024年3月17日(日)開催予定の第212回「河川文化を語る会」～地域に根ざした川の研究所 30年のあゆみ～において議論してみたいと思いますので、皆様ふるってご参加くださいませ。

豊田市矢作川研究所は、設立時に豊田市・枝下用水・矢作川漁業協同組合土地改良区3者による第3セクターとして発足した経緯があります。そのことも踏まえ、また矢作川流域は1969年に設立された矢水協などの活動により、全国的にも流域連携、上下流連携のパイオニア的な存在として知られており、研究所設立前の矢作川の歴史についてもまず触れておきます。補完資料として「矢作川流域圏懇談会10年誌」(2023年10月第2版発行)も読まれることをお勧めします。

【矢作川前史】

- 様々な主体の設立／1883(明治16)枝下用水開削の開始、1902枝下用水普通水利組合設立、1902(明治35)矢作川漁業協同組合の設立、1934(昭和9)根羽川漁業協同組合の設立、1937(昭和12)トヨタ自動車工業が拳母町に設立される、1950東幡豆漁業協同組合設立、1951根羽村森林組合設立、1951拳母市市政開始(1959豊田市に改名)、1968枝下用水土地改良区誕生
- 流域圏内の開発等と環境保全の取り組み／1926～百月、越戸など水力発電ダム建設、1958明治用水頭首工完成、1969矢作川沿岸水質保全協議会の設立、1970(公害国会)水質汚濁防止法制定、1970矢作ダム完成、1971矢作川流域開発研究会(矢流研)設立「流域は一つ、運命共同体」を提唱(開発者側組織)1972.6月矢水協が山砂利採取業者3社を告発、水質汚濁防止法摘発の全国第1号となった1972(昭和)47災害による甚大な被害、1973一色町漁協婦人部が「矢作川をきれいにする会」設立1974豊田市自然愛護協会設立1976豊田市西広瀬小学校児童会が水質観測開始「矢作川の見張り番」と呼ばれる(～現在まで連続観測)1976愛知県と矢水協が紳士協定を締結(対決から協調へ)、以降山と海との上下流交流が促進される1977.4月創刊～1985.7月(100号)「月刊矢作川」発行(三浦孝司氏ら有志)1986開発者(建設業界)による支援組織として矢作川環境技術研究会を設立1987矢作川筏下り大会始まる(～200620回開催)、1989平成元年災害発生

【豊田・近自然時代が始まる】

- 河川法改正へ／1990(H2).11月建設省が「多自然型川づくりの推進について」を全国に通達1991豊田市矢作川環境整備計画検討委員会設立(2月)、欧州視察へ(9月)(「ヨーロッパ近自然紀行」新見幾男)1991～愛知県が初の多自然型川づくりとして矢作川・古巣にて水制工群設置、豊田市は、加納川、太田川、そして児ノ口公園の近自然工事(1994～1995)へ1993古巣水辺公園愛護会発足1994.4月～豊田市水道水源基金(水道使用量1tにつき1円を充当)開始



早春の古風水辺公園



公園の管理作業を終え、一息つく人々



豊田市矢作川環境整備計画検討委員会の欧州視察(1991.9月)が矢作川研究所設立の大きなきっかけになったと聞いています。視察に参加した豊田市・愛知県技術者メンバーは帰国後、早速近自然工法(多自然型川づくり)に着手すると共に、「一つの川に一つの博物館(研究所)を」と、考え始めたようです。欧州の河川工学と生態学との融合が必要との理念がベースであり、さらに社会学的な観点も取り入れられました(古巣プロジェクトなど)。

研究所創設・初期の運営にあたっては様々な人たちの思いと尽力があり、大いなる敬意を表します。これら方々の内、主任研究員・田中蕃氏(2007.5月逝去)、幹事(枝下用水土地改良区)・今井勝美氏(2007.12月逝去)、事務局長・新見幾男氏(2023.1月逝去)、さらには初代研究所長だった松武義聰氏(2021.1月逝去)など既に旅立たれた方もおり、30年という月日の長さを痛感するとともに、それらの遺志をより良い形で継承していく必要があります。



田中蕃さん



今井勝美さん



新見幾男さん



松武義聰さん

【豊田市矢作川研究所創設期のあゆみ】

- 第3セクター・矢作川研究所の設立／1994(H6).7月 矢作川研究所設立(豊田市・枝下用水土地改良区・矢作漁協)
- 【黎明期】 会長;鈴木公平(市助役)、副会長・監事;矢作川漁業協同組合長、枝下用水土地改良区理事長、事務局長;新見幾男、幹事;村山志郎、事務局;(市河川課)宮田昌和、(事務局員)田口美恵子、主任研究員 田中蕃、共同研究員等;高橋勇夫、新見克也(西日本科学技術研究所)、間野隆裕(昆虫)、古川彰(中京大学助教授)、白金晶子(名城大学動物学研究室)、内田朝子、他
- 1994～ 矢作川データベースの構築(基礎事業)／「矢作川100年誌 資料研究」へ
- 1995.3月 豊田市矢作川環境整備計画策定・公表される
- 1995～ 都市ブロック川辺林調査(5か年～1999)
- 1995～1997 愛知県・矢作川研究所が土砂投入実験(阿摺ダム下流、越戸ダム下流)～維持土砂流量の検討
- 1996.3月 矢作川研究所シンポジウムスタート、第1回・第2回(1997)のテーマは「**受難のアユの道を辿って**」
- パネリストとして松武義聰氏(豊田加茂広域圏)、梅村諒二氏(豊田市自然愛護協会)も参加
- 1996 矢作川・お釣り土場(水辺公園)の整備／竹林の伐採と管理手法確立へ
- 1996.9月～ 矢作川天然アユ調査会発足 会長;梅村諒二
- 1997.3月～ 年報「矢作川研究」(No.1)発行／以降毎年3月発行 ～現在2024年 No.28まで発行されている

1998.2月 第3回矢作川研究所シンポジウム

「森・都市・海をつなぐ緑のビオトープ回廊をめざして」早稲田大学 洲崎燈子氏、広島大学 中坪孝之氏

1998.4月 研究員常勤体制に移行／洲崎燈子氏(植物)赴任、他に 田中蕃主任研究員、白金晶子氏(水生生物)

1998～ 矢作川水源林調査開始

1998.5月～ 月報「Rio」発行(スペイン語で「川」を意味)

～最新の2024.1月号まで No.230まで発刊(現在は季刊)

1999.6月～「古巣プロジェクト」開始(～2001年度)

名古屋大学 辻本哲郎研究室参加、

京都大学大学院 芝村龍太氏も加わる

1999.7月 研究所を(河川課内から)職員会館1階に移動

1999.8月～ 矢作川堤防除草トラ刈り効果調査(建設省委託)

1999.11月 天然アユ保全対策専門委員会発足

1999.12月 矢作川研究所ホームページ(HP)開設

2000.3月 第5回 シンポジウム「森から川を考える」

～水道水源基金の活用を祈念して 内山節、只木良也

2000年度(準用)太田川多自然型川づくり(1990-1999施工)モニ



2000.9.11～12 東海豪雨、矢作川流域含め県内に甚大な被害が発生

被災した古巣水辺公園の復旧方法を

地元、漁協と協議しながら再生させた(2001.3月)、

水制工復旧に当たっては福留脩文氏の指導を仰ぐ



東海豪雨で矢作ダムに流入した大量の流木

● 東海豪雨以降の矢作川研究所／

2000.10月～ 河口域(三河湾)でのアユ調査
2000.10月「川辺環境と流域社会」座談会開催(鈴木公平市長)／
都市ブロック環境調査(1995-1999)成果を踏まえて
土木研究所 島谷幸宏、古川彰、田中蕃、新見幾男、洲崎燈子
2001.2月 第6回 シンポジウム「あたらしい流域の文化を考える」
京都精華大学 嘉田由紀子、国立民族学博物館 秋道智彌

2001.4月 小川都氏(社会学)が研究所に就任(非常勤)、「Rio」カラー版に

2001.5月 矢作川「川会議」開始・「矢作川宣言」の採択

2001.7月 第4回「川の日」WSにて「川会議」グランプリ受賞

2001.11月～2002.1月「矢作川を語る」座談会(5回開催)

2001.12月～2002.1月 愛知県が笹戸ダム湖内背割堤を施工

2002.1月 初代矢作川研究所長に松武義聰氏就任(～2003.3月)

2002.2月 第7回 シンポジウム「矢作川の自然をまちのなかに」

都市ブロック環境調査(1995-1999)の成果より

田中蕃、洲崎燈子、(関西学院大学)古川彰

2002.2月「矢作川100年誌 資料研究 第1集」の発刊

2002.3月 矢作川の総合管理に向け県・漁協が合意

2002年度～「川を生かしたまちづくり」プロジェクト開始

2002.5月(第2回川会議)「矢作川学校」の開設

2002.6月「東海豪雨 矢作川流域・記憶と記録」発行

2002.10月「古巣プロジェクト」座談会開催

2002.10月「川会議」が韓国「川の日」WSに招待される

2003.2月 矢作川漁協が「環境漁協宣言」を採択

～矢作川漁協100年誌「環境漁協宣言」の発刊(2003.12月)

* 矢作川研究No.7(2003.3月) 新見幾男氏寄稿文参照



2002.10月 韓国「川の日」WSに招待された 矢作川「川会議」メンバー
右側3人が 碓さくら氏、宮田昌和氏、近藤



矢作川筏下り大会 1987-2006まで20回開催
近藤は、2003/2004年に参加した

* 2003.3月「愛知・川の会」設立、川の会は矢作川「川会議」と共に、2005「川の日」WS in 矢作川・現地実行委員会を担い準備を進めていく(2003～2005年)、後に第6回WS(2003.7月)でグランプリを受賞した「ECOSTOCK on 水辺」を主催する「だれでもばんぱく協会」(谷岡郁子代表)も実行委員会に加わった

愛知・川の会設立の動機の一つが、2005年開催が決まった 第8回全国「川の日」ワークショップ in 矢作川において、現地実行委員会を担うことであり、豊田市矢作川研究所や「川会議」とも連携を進めていくことになりました。同時期において近藤は初めて、念願の矢作川筏下り大会に参加することが出来ましたが、この筏下り大会も2006年を最後に終結。2007年頃までのこの時期は、矢作川でも世代交代という意味で、一つの時代の転機を迎えていた様な気がします。

● 豊田市営・矢作川研究所の時代へ ～研究所設立10周年を迎える

2003.4月 研究所が第3セクターから市営体制に移行、矢作川漁協・枝下用水土地改良区は運営協議会に

2003.4月～ 2代目所長に梅村鋳二氏就任(～2005.9月)、松武氏は常任顧問に(～2017.3月)、

2003.5月 第3回「川会議」～次世代に続く川づくり～ 山道省三氏、谷岡郁子氏、県内の川団体が集結

2003年 初音川ビオトープが整備される、以降研究所がモニタリングを実施

2004.2月 第9回矢作川研究所シンポジウム

「矢作川のむかし・いま・そしてこれから 一古巣プロジェクトの成果から」 辻本哲郎、嘉田由紀子、古川彰

2004.7月 矢作川研究所10周年(「Rio」2004.8月号参照)

矢作川研究所30年の歴史を10年ごとに区分すると、既に第Ⅰ期(1994～2004)において、矢作川研究所シンポジウム、社会学的視点も含めた古川プロジェクトの展開、「矢作川研究」や「Rio」発刊、矢作川宣言と「川会議」の開催、矢作川学校の開設、環境漁協宣言へと繋がる「矢作川100年誌 資料研究」発刊など、現在まで継承される主要なプロジェクトの基盤が構築されています。次の第Ⅱ期(2004～2014)を考える上での重要な転換点は、やはり2005年4月の豊田市大合併になりました。これにより豊田市は矢作川上流の森林域までを管轄することとなり、研究所は既に天然アユ調査会により(1996設立)、三河湾(海)までをフィールドとしていましたが、さらに上流域の森林にまで視野を広げることとなります。2004年8月に東京大学愛知演習林との合同セミナーを実施したことが極めて象徴的で、東京大学・蔵治光一郎教授とは2005年より「矢作川森の健康診断」を共にスタートさせています。

● 豊田市大合併後の取組み

2004.8月 東京大学愛知演習林・研究所合同セミナー／蔵治光一郎氏登場

2005.2月 第1回「矢作川学校」ミニシンポジウム開催

2005.3/25～9/25 愛知万博「愛・地球博」開催

2005.4/1 豊田市・平成の大合併

2005.4月 矢作川漁協 森林塾の設立(4/15)

2005.6月 第1回「矢作川 森の健康診断」開催
(～2014 第10回まで実施)

2005.7月 第8回「川の日」ワークショップ
in 矢作川開催、全国から600名が集う



2005.10月 「Rio」10月号(No.90)に初めて鈴木輝明氏登場「アマモ場の役割」

2006.2月 第11回矢作川研究所シンポジウム「矢作川流域の人工林を考える」
蔵治光一郎、原田裕保、根羽村長 小木曾亮弐

2006 ～ 矢作川河畔林調査事業始まる(～2008年度)
／2007年度「矢作川河畔林づくり」WSの展開

2006.5月 最後の筏下り大会(第20回)

2006～ 矢作川漁協「森林塾」河畔竹林伐採開始

2007.2月 第12回矢作川研究所シンポジウム「小さな藻の大きな役割」



* 2007.4月 近藤が10年ぶりに豊田加茂建設事務所(河川)赴任(～2008.3月 1年のみ)／籠川全面魚道群整備、逢妻女川(外来種)アレチウリ駆除検討、家下川リバーキーパーズ用階段整備などに着手する

2007.4月 矢作川水族館発足、アメリカナマズの調査にも着手

2007.4/16～4/17 秋篠宮殿下(森誠一教授共)が研究所、矢作川を訪問

2007.5/21未明 田中蕃さん逝去される、

2007.8月「水シンポジウム2007 in あいち」開催

／土木学会、愛知県、(協力)愛知・川の会など

2007.9月「Rio」に近藤が「川づくり ～川と向きあうことの覚悟」寄稿



2007年にスタートした「矢作川水族館」



2007.11月 第2回「天然アユを増やすと決めた漁協のシンポジウム」
2007矢作川大会の開催

2008.3月 矢作川河畔林整備ワークショップの開催 上流域展開へ



2007年11月、能楽堂での漁協シンポジウム

2008.4月 達志保研究員(民俗学)就任

達志保研究員

2008.5月 第8回「川会議」～魚(雑魚)から見る矢作川

「矢作川水族館の取組み」～中本賢、阿部夏丸

2008.5月～「枝下用水120年誌」編集作業始まる(達志保 担当)

豊田土地改良区に「枝下用水120年誌 編集委員会」設置



中本 賢



阿部 夏丸

- 2008.8月 矢作川水系漁業協同組合連合会(3県8漁協)設立
 * 2008.12月 とよた都市農山村交流ネットワーク設立(山本薫久)
 ～ 新盛里山耕流塾など農山村で様々な動きが芽吹いている
 2009.1月 第14回矢作川研究所シンポジウム「守りたい矢作川の河畔林」
 知られざる生き物たちのメッセージ 大畑孝二、矢部隆
 ～ 生物多様性条約 CBD/COP10へのキャラバン
 2009.3月 漁協が大繁茂してきたオオカナダモを駆除
 2010～2014 大規模な駆除作業(駆除検討会事務局は研究所)
 2009.5月 第9回「川会議」～ 矢作川の風景と生物多様性
 生物多様性フォーラム 清野聡子、近藤朗、
 大畑孝二、碓伸夫、コーディネーター: 古川彰
 2009.7月～ 家下川・榊塚川での農業用水路再生の取組み
 を始める(矢作川水族館、土地改良区等)
 2009.7月 座談会「枝下用水のこれから」(編集委員会)
 / 岩月寿、野場嘉輝、古川彰、達志保
 ◆ 2009.7月 (国) 矢作川水系河川整備計画策定される
 2009.10月 第1回枝下用水史研究会スタートする
 2009.11月～ ニュースレター「枝下用水日記-120年誌編集-」発行へ
 2009.11月 研究所セミナー「外来種」
 / 琵琶湖博物館 中井克樹 ～ 行政は「値踏み」する
 2010.1月 第15回矢作川研究所シンポジウム(名古屋市内開催)
 「流域で守る生命の豊かさ」基調講演: 涌井史郎
 対談: 阿部夏丸、中本賢、
 PD: 丹羽健司、新見幾男、浅香智也、大沼淳一
 ～ 生物多様性条約CBD/COP10 パートナーシップ事業



生物多様性をテーマとした第9回「川会議」



家下川周辺の農業用水路再生の取組み



2010年1月 矢作川研究所シンポジウム

- 2010.4月 矢作川漁協「森林塾」からNPO「矢作川森林塾」が設立
 2010.6月～「森林塾」オオカナダモの繁茂調査、駆除活動
 2010.5月 第10回「川会議」～ みんなで守る矢作川の生物多様性
 名古屋大学 辻本哲郎「人と川と生物多様性」

◆ 2010.8月 (国) 矢作川流域圏懇談会設立 / 矢作川研究所も参加

- 2010.10月 生物多様性条約COP10の開催
 / 生物多様性交流フェア出展、矢作川エキスカッション開催
 2011.2月 第16回矢作川研究所シンポジウム
 「矢作川の外來生物」基調講演: 中井克樹氏
 カワヒバリガイ(白金・内田朝子)、オオカナダモ、
 アメリカナマズ(酒井博嗣)、アレチウリ(西村薫)
 PD: 阿部夏丸、新見克也、西村薫
 2011年 矢作川資料研究第2集「枝下用水120年誌資料集」その1 発行(2011.3月)



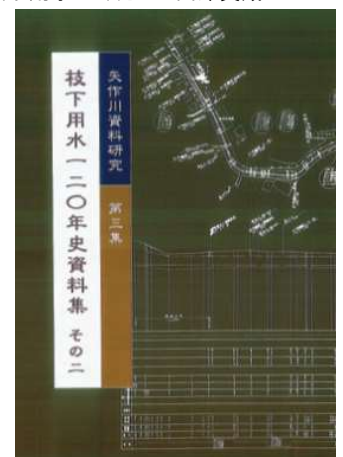
枝下用水に尽力した西澤真蔵

▶ 矢作川資料研究第2集『枝下用水120年史資料集』その1ができました。

2008年度より枝下用水120年史編集作業が始まり、このたびようやく資料集その1を発行することができました。その1は枝下用水開削の始まる1880年代から1929年の越戸ダムが完成するまでを取り上げました。ご興味ある方、矢作川研究所へお問い合わせください。
 【担当: 達】



- 2011年～ 矢作川におけるアメリカナマズの調査
 2012.2月 阿摺ダム直下にて、大規模なかいぼり調査実施、魚29種確認
 (特定外来2)、アメリカナマズも捕獲(矢作川研究 No.19参照)
 2012.4月 山本大輔研究員就任
 2013.3月 矢作川研究No.17 発行 / 「枝下用水史」特集
 2013.3月 矢作川資料研究第3集「枝下用水120年誌資料集」その2 発行
 2013.4月 宮田昌和氏が所長就任、研究顧問に谷田一三氏
 愛知・川の会 記念講演会にて「矢作川研究所がなくてはならないこと」発表



愛知・川の会10周年の総会(2013.5月)にて宮田所長から「矢作川研究所がなくてはならないこと」と講演いただいたのは様々な経緯があり、まずこれに先立つ2013.2月の当会記念講演会にて、東京大学・沖大幹教授から「川と水と国土の未来を考える」上では、「私たちは出来ることではなく、やらなければいけないことをなすべきだ」との提言があったこと。さらに滋賀県立琵琶湖博物館の中井克樹学芸員からは、かつて「行政は値踏みせざるを得ない。やった方がよいことは山ほどあるが、全てが出来るわけではない。その中からやらなければいけないことは何か、それをきっちり示すことが研究者の役割であろう」と仰った。ちなみにこれは、2009.11月に開催された矢作川研究所の外来種対策セミナーでの言葉でした。二つの言葉の意味合いは異なるものですが、それら両方とも踏まえて、次の10年を見据えていかねばならないということでしょう。愛知・川の会も、矢作川研究所も、ということです。

第Ⅱ期で、上流域の森林の問題については、この期間がちょうど「矢作川森の健康診断」の10年とほぼ重なっており、基本的なデータ(愛知・岐阜・長野県)が構築され、第Ⅲ期はその後の展開を模索することになります。そのための連携ツールとして重要となるのが、国交省が事務局を担う「矢作川流域圏懇談会」(2010年設立)であり、ちょうど良いタイミングとなりました。その担い手づくりも重要であり、そういった意味では豊田市内で都市と農山村の交流が徐々に始められたこと、山村などにこの時期外部から若い人たちが集まってきていたこと、懇談会山部会で2013年から「山村再生担い手づくり事例集」が始められたことなど、緩やかではあるものの連携の可能性が見えていたのです。

放置されていた河畔林の整備については、研究所が大合併後の2006年から始めていた河畔林調査と地域住民を巻き込んだ河畔林づくりワークショップの成果が徐々に出てきており、さらには都心でも「矢作川森林塾」の活動が活発となります。生物多様性条約COP10でも議論となった外来種問題については引続きの課題として、第Ⅲ期へと継承されていきます。

第Ⅱ期で大きなミッションだった「枝下用水120年誌」事業については、矢作川資料研究第2集その1(2011.3月)、第3集その2(2013.3月)まで発行し、達志保研究員はその直後研究所を退任されました。しかしながら彼女の研究はまだ終わっておらず、豊田土地改良区・枝下用水130年史編集委員会において「枝下用水史」を上梓(風媒社2015.4月)、さらに豊田土地改良区資料室などを経て今も続編に向け継続されているという。社会学研究員としては後任の吉橋久美子さんが、2015年度より赴任し、第Ⅲ期での新たなミッションとして、市民による小さな自然再生「ふるさとの川づくり」事業に取組み、より多くの市民を巻き込んだ「新時代の連携」を展開することになるのです。

● 矢作川研究所20周年

2013.4月 豊田市山村拠点となる「おいでん・さんそんセンター」開設

2013.12月 福留脩文氏逝去(2013.12/10)

2014.2月 第19回矢作川研究所(創立20周年記念)シンポジウム

「流域を調べ、流域をかえる」 豊田市矢作川研究所の20年とこれから
研究所研究員全員／宮田所長×萱場祐一、高橋勇夫、大畑孝二、
古川彰、丹羽健司、新見克也、碓さくら、羽根博之



● 矢作川研究所の新時代へ

2014.6月 第10回 矢作川森の健康診断(最終回)

2014.10月 「矢作川森の健康診断」10年をふり返し、100年後・1000年後の展望する会 開催



2015.4月 吉橋久美子研究員が就任

2015.4月 「枝下用水史」枝下用水130年誌編集委員会編 発行

2015.5月 第15回「川会議」* 結果的に最後の川会議となる

～ 母なる川、矢作川のこれから～

鈴木公平 前市長 / 碓さくら 代表、新見克也、

(根羽村森林組合) 今村豊、

(東幡豆漁協) 石川金男 組合長

2015年6月～ 岩本川ふるさとの川づくり事業

WS(6月、9月、12月)「岩本川探検隊」(7月、10月)

～ 川づくりへと移行していく



吉橋久美子 研究員
岩本川 ふるさとの
川づくり事業 担当



岩本川 探検隊

矢作川における近自然工法、及び市民連携のシンボルであった古巣水辺公園なのですが、ここで2001年より開催されていた「川会議」は2015年の第15回をもって終焉、その後水辺公園自体も実質閉鎖されるという出来事は少なからずショックではありましたが、時代は確実に変化しており、いつまでも同じところに留まっていけないというメッセージでしょうか。強烈なリーダーシップで矢作川の環境再生などを引っ張ってきたリーダーたちは 2013年に逝去された福留脩文氏を始め、20年を経た時代の中で次々とリタイアしていく状況でもありました。全ての人たちが市民がセクターや世代を超えて共通の課題に向き合っていくシステムを構築すべき時代なのだと痛感したのです。私自身は、もっと広がっていかねばならないと決意した出来事でもあります。

2016.3月 矢作川研究No.20 発行／

「矢作川オオカナダモ駆除検討会」の記録 内田朝子、白金晶子、古川彰、角野康郎
検討会；2010.6月発足～2015.1月(5回開催)までの記録

2016.3月 上流域の水辺愛護会 活動報告会／

2006～河畔林調査、2007年度 河畔林整備WS以降、矢作川上流域の河畔林(川辺の林)で活動する
「大河原水辺愛護会」「縄文の里水辺公園愛護会」「矢作川自治区水辺愛護会」「有間竹林愛護会」
「小渡セイゴ水辺愛護会」が取り組みを紹介

2016.6月「豊田市 矢作川河川環境活性化プラン」策定される(6/15)

2014.10月 検討委員会発足(以降～2015.10月迄 4回開催)

2016.6月 豊田市矢作川研究所 研究成果報告会

「いいじゃん、矢作川！もっといい川にしよまい！」

【講演】森川海をつなぐ自然再生の意義／木村尚

【研究成果報告と意見交換会】洲崎、山本敏、坂本竜児

豊田市 矢作川河川環境活性化プラン



豊田市矢作川研究所誕生の源は1991～1994年度にかけて策定された「豊田市矢作川環境整備計画」(1995.3月公表)であることは冒頭に述べた通りなのですが、この計画をさらに発展させた(新)「豊田市 矢作川河川環境活性化プラン」が2016.6月に公表されました。この内容は、矢作川研究所20年間の成果が十分に反映されたものであり、第Ⅲ期以降の事業展開を見据えていくものとなっています。これまでの流域の課題を踏まえ「めざすべき矢作川の姿」を提案、既にこの中で具体的内容として、ふるさとの川づくり事業の展開、矢作川森林塾との連携、ミツバチ養蜂などを活用した市民活動活性化など提案されていますが、とりわけ重要なのはこれらを通じて流域での「人を育てること」に注目しており、私自身はこの点を新時代の計画として大きく評価しています。

2016年度～ 岩本川ふるさとの川づくり事業② 展開

川づくり体験説明会(2016.6月)、岩本川川づくり体験会(7月)、

岩本川探検隊(8月)、岩本川創友会発足(2017.3/26)、

川づくり(2017.4月、2018.3月 水制工)「小さな自然再生」市民工事へ

2016.10月 ドローン空撮(逢妻女川、逢妻男川)によるカメ調査

「アカミガメ対策推進プロジェクト」の開始／ 専門家；矢部隆

ふるさとの小川で自然再生中!



矢作川を始めとする豊田市内での水辺の外来種問題については、主に第Ⅱ期頃から顕著となっており、まず私が再赴任した豊田加茂建設事務所では2007年より(境川流域)逢妻女川でのアレチウリ駆除対策に取組みマニュアルを作成(2009)、同年、矢作川水族館もアメリカナマズ調査に着手、2009年には矢作川で大繁殖してきたオオカナダモ駆除に矢作川漁協が乗り出し、検討会も発足しました(2010～)。その他、2004年頃から確認されたカワヒバリガイなど、様々な課題が指摘されてきたのです。矢作川研究所では、これらの外来種に関して地道な調査を続けていましたが、(新)活性化プランにおいても「外来種対策」を検討することとしており、第Ⅲ期では新たに「アカミガメ対策推進プロジェクト」が始動しました。当プロジェクトの成果としては、2020.3月に「アカミガメ防除マニュアル」が発行され、これは評価が高いものです。



2016.10月 ニホンミツバチの採蜜会開催 水辺愛護会の活性化、多様化へ
(古巣水辺公園愛護会と共に)

2017.10月 ニホンミツバチの採蜜会開催／ 百々水辺愛護会、初音川ビオトープ愛護会(共) 養蜂とハチミツの活用を通じた「恵み・楽しみ」の創造へ
(～2015年より「中部日本みつばちの会」協力により、養蜂試行)

2017年度～ 初音川ビオトープ改修スタート／ 愛知県の逢妻男川改修工事(当区間2016～)が始まったことによる。池内水質改善も試みる
洲崎研究員による植生改善(草刈方法)検討も実施



矢作川にいくつかのダム(矢作ダム始め7基)が建設されて以降の最も大きな課題としては、矢作川が本来有していたであろうダイナミズムの喪失があげられます。洪水による攪乱の減少などにより河床が固定化、アーマー化するなど、様々な河川環境・生態系への影響が以前から指摘されてきました。前頁で紹介した外来種の問題も、ある意味その一つかもしれません。愛知県が1991年～整備してきた古巣水制工群による多自然型川づくりは、一区間(800m)でダイナミズム回復を目指したものであり一定の効果は見られましたが、本来矢作川全体で取り組むべきミッションでしょう。その後、河川への土砂供給不足への試みとして、愛知県や豊田市、さらには国交省(土砂排砂バイパス検討のため)による土砂仮置き実験なども展開されましたが、土砂だけでなく洪水によるフラッシュなど流況改善の必要性を強く感じました。「活性化プラン」においては、経年的な流況悪化(流量の減少)の問題も指摘されており、私たちは腰を据えて対応していかなければなりません。



矢作川 古巣水制工・水辺公園
2007土木学会デザイン賞受賞



流況改善そのものは簡単に実現できるものではありませんが、矢作川研究所が自ら矢作川の河床環境改善の試みに着手したのが、「阿摺ダム下流(通称ソジバ)矢作川河床環境改善実験・調査」であり、2017年度から始められました。

2017年度～ 阿摺ダム下流(通称ソジバ)での矢作川河床環境改善実験・調査
／4月～ 矢作ダム湖内堆積砂礫をソジバに投入、以降モニタリング継続
(9月)応用生態工学会(名古屋大会場)にて途中経過を報告
「RIO」No.206(2018.1月号)にて中間報告



ソジバ砂礫投入実験

2018年度 阿摺ダム下流(通称ソジバ)矢作川河床環境改善実験・調査
／2018.3月 矢作ダム湖内堆積砂礫をソジバに投入、大きな石も点在させる
2019年度 阿摺ダム下流(通称ソジバ)矢作川河床環境改善実験・調査
／アユのなわばり行動調査実施(ビデオ映像の活用)

2020.3月 「アカミガメ防除マニュアル」発行
／豊田市アカミガメ防除プロジェクト実行委員会編
2020年度 阿摺ダム下流(通称ソジバ) 河床環境改善実験・調査
／(5月 調査)2017実験開始～2018年度まで、アユへの効果が見られたものの、2019年春にコケ植物が進入・生育し始め、さらに繁茂拡大し改善効果が確認されない
* 2017～2020年度までの実験結果・効果などについては、「矢作川研究No.25」(2021.1月発行)にまとめられている



「地域の人々で身近な自然を育むために
アカミガメ防除マニュアル」
豊田市アカミガメ防除プロジェクト実行委員会
(事務局:豊田市矢作川研究所)、2020年3月発行

2020.8月～ ふるさとの川づくり第2弾として、広沢川(籠川支流)での事業展開を始める／猿投町まちづくり協議会との協働

2021.1月 「矢作川研究No.25」発行(本号より研究所事業報告掲載)
SDGs未来都市・豊田市(研究所)として持続可能なまちづくりに貢献していく／ソジバ実験、ニホンミツバチ養蜂・ヤブツバキ活用した愛護活動活性化など

2021.3月 「川づくりガイドブック」【草地編】発行

2022.3月 「川づくりガイドブック」【竹林編】発行

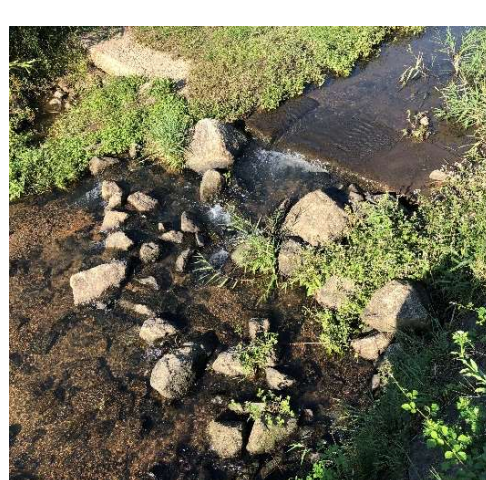


1990年頃より愛知県豊田土木事務所（現在の豊田加茂建設事務所）と豊田市は、競って近自然工法による川づくりに取り組みまさしく切磋琢磨していました。愛知県は、1991年から矢作川の古岸水制工群の整備に始まり、逢妻女川、仁王川、市木川など試行錯誤を重ね、豊田市もそれに先んじて加納川、ソウレ川、太田川、都心の児ノロ公園整備などの川づくりを展開し、全国でもパイオニア的な存在でした。これらの取り組みを普遍化、浸透させていくことが、その次の課題となりますが、この点において秀逸だったのは豊田市の方で、やはり豊田市矢作川研究所の存在が大きかったろうと思います。県での河川改修の課題は、整備後のモニタリングが行われないこと、維持管理まで含めた視点が欠けていたこと、地域住民との連携にまで踏み込めなかったことなどありますが、豊田市矢作川研究所が研究分野でフォローアップを行い、維持管理面での助言も含めて地域との関係を構築していったことの意義はとても大きいのです。第Ⅰ期においては、例えばお釣り土場での竹林伐採、河畔林管理へのアドバイスを行い管理手法を確立、建設省委託での矢作川堤防のトラ刈り効果を把握、また太田川などのモニタリングも実施していました。第Ⅱ期頃より研究所自ら川づくりを行うようになり、逢妻男川沿いの初音川ビオトープの整備・植生調査（2003～）、籠川沿いビオトープ整備（2011～）、太田川の修復工事（2012）などがありますが、豊田市の強みはそれぞれに水辺愛護会が誕生しており、きめ細やかな管理上の連携が図られることにあります。主に上流域の愛護会では、河畔林整備を行う活動も随分と広がってきました。



矢作川お釣り土場での河畔林管理
2007土木学会デザイン賞受賞

新時代の川づくりとは、調査・計画づくり・施工・維持管理・モニタリングといった流れを河川管理者だけで行うのではなく、地域住民や子どもたちなども巻き込んでいくことが重要となってきました。そういった意味で第Ⅲ期で始められた「ふるさとの川づくり」は実に画期的な取り組みであり、もっともっと評価されても良いと思っています。ワークショップなどを通じた意見の集約、将来像の共有を経て、工事についても市民が出来ることは市民でやろう。そのことにより維持管理面においても地域での愛着が広く生まれることになりました。第1弾として岩本川（2015～）、第2弾として広沢川（2020～）が展開されており、これが矢作川流域全体に広がっていけば・・・という未来に向けた流域像を描くことが出来ます。（下記写真はいずれも岩本川）



「ふるさとの川づくり」を主に担当されていた吉橋久美子研究員は、2023.3月をもって退任されたのですが、社会学担当としての彼女の研究は従来とやや異なり、愛護団体の方々や子どもたちへの丹念な聞き取りや活動による行動変化などを分析し、これからの水辺活動のあり方や発展・活性化の可能性などを探るものに見えました。このような研究が多分野研究員成果と相まって「ふるさとの川づくり」実践へと繋がっていったのではないのでしょうか。その研究の一端は、「**矢作川研究**」No.21(2017)～No.27(2007)の間で紹介されており、是非ともご覧ください。なお、活性化プラン策定時(2016)に15と紹介されていた水辺愛護団体の数は現在では25団体まで増えているようです(豊田市内にて)。

今回の記事は冒頭で述べた様に、外部の視点から見た豊田市矢作川研究所の30年です。外から見える研究所の成果のみならず、今回詳しく紹介していませんが、全ての研究員の方々が地道に継続されている基礎研究の分野も当然あり、それについては、現在まで28巻発行されている「**矢作川研究**」をご覧いただければ、その一端が垣間見えると思います。これは膨大なデータベースでありますので、この記事がそのインデックスにでもなれば幸いです。<https://www.yahagigawa.jp/kenkyuu/>

こまめ 第25回 豊田市矢作川研究所
シンポジウム代替行事

みんなでつくる
ふるさとの川!

～ふるさとの川づくり事業のこれまでとこれから～

動画
配信



第25回 矢作川研究所シンポジウム
代替行事 2021.2月

2024 矢作川流域圏でのクロスオーバー！

豊田市矢作川研究所、といより豊田市のこれからの課題としては、研究所30年の膨大な成果を一部分野に限ることなくあらゆる政策面で近自然的な視点を取り入れ、活用していくことではないでしょうか。そういった意味では山本大輔研究員（魚類）が一時期環境部局に籍を置いていた（2021～2022年度）ことなど、有意義な人事だったのかもしれませんが。さらに言えば河川管理者である国交省や愛知県などにおいても同様であり、流域治水やグリーンインフラなどを掲げている現在では、研究所とのさらなる連携を相互利益となる形で進めていく覚悟が必要でしょう。

最後に、2024年に入ってから愛知・川の会、中部流域連携ネットワーク、(国)矢作川流域圏懇談会、三河湾・伊勢湾流域圏をフィールドとする22世紀奈佐の浜プロジェクト委員会、担い手づくりを進める地域の未来・志援センターなどがコラボ、いやクロスオーバーしながら、「今改めて流域とは何かを考える」プロジェクトを展開し、以下のプログラムを実施・あるいは予定しており、むろん豊田市矢作川研究所も含めてのことです。これはまだキックオフでしかありません。

- ◇ 2024年 1月20日(土) 第2回中部のいい川ワークショップ in 矢作川流域圏 / 豊田市能楽堂
【テーマ】「流域治水と言う勿かれ」(中部流域連携ネットワーク主催/愛知・川の会共催)



- ◇ 2024年 1月21日(日) 矢作川水系(岡崎・幸田)エクスカーショ (愛知・川の会主催)
【テーマ】「平成20年(2008)8月末豪雨から15年、流域治水と川づくりを考える」



矢作川流域圏公開講座



- ◇ 2024年 2月12日(祝) 第4回 矢作川流域圏懇談会 公開講座
／豊田市内(矢作川流域圏懇談会主催)
【テーマ】「川がつなぐ 私たちの未来」
～知らなかった山・川・里・海のつながり～

- ◇ 2024年 3月17日(日) 第212回 河川文化を語る会
／ウインクあいち(日本河川協会主催/愛知・川の会共催)
【テーマ】「地域に根ざした川の研究所 30年のあゆみ」
講師として豊田市矢作川研究所の宮田所長、
洲崎燈子主任研究員をお招きしています。チラシを
同封してありますので、ぜひお越しくださいませ。

定員
先着170名
第212回「河川文化を語る会」
地域に根ざした川の研究所 30年のあゆみ



講師: 豊田市矢作川研究所
所長 宮田 昌和 氏
主任研究員 洲崎 燈子 氏

